

子供の未来のために

学校と企業・経営者の交流活動推進委員会活動レポート



活力ある21世紀を支えていく人材の育成・教育をめざし、教育現場では大規模な構造改革が進行。

それに伴い、実社会の第一線で活躍する企業経営者にも相当の役割が期待されている。

ともすると「企業経営者は学校の現状を知らず、学校も企業や学校外の社会のことを知らない」と批判されがちだった両者の関係も

この数年で大きく変化した。

学校と企業・経営者の交流活動を機に、学校教育は今、新たな展開を見せ始めている。



経済同友会 学校と企業・経営者の交流活動

「子供の危機は、大人の危機」

未来を担う子供たちのために、企業・経営者がいまできること——。

経済同友会では、1999年以来、企業経営者を教育現場に派遣し、授業や講演を行う「交流活動」を積極的に行ってきた。将来への夢や希望、未来へのビジョンを描けない子供たちが増えている中、社会の実情を、体験を通して伝えることのできる企業経営者への期待は大きい。

積極的な交流活動を
人材育成の一助に

完全学校週5日制、新学習指導要領、総合的な学習の時間、絶対評価……。今、学校では大きな教育改革が進められているが、それを成功に導くためには家庭・地域・企業の協力・連携が不可欠だ。経済同友会では、子供たちの就業観を育てる機会を提供するため、1999年度より経営者自らが中学や高校に講師として出向いて授業や講演を行う「学校と企業・経営者の交流活動」を積極的に展開している。

今、子供の教育に
最も必要とされることは？

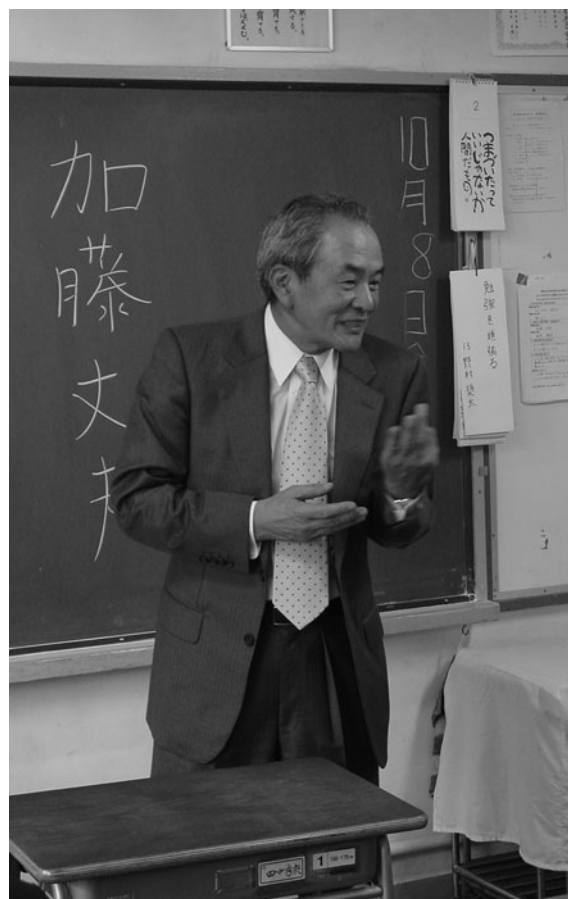
日本では活力ある21世紀を支えていける人材の育成・教育が急務となっている。次世代を担う子供たちには社会人として必要な基礎学力と社会ルールをしっかり修得し、創造的で多様な個性を伸ばしていくことが求められる。

ところが現実には、学級崩壊、不

登校、いじめ、少年犯罪など、学校や家庭に起因する社会問題が頻発。就職についても、若者のフリーター化と離職率アップが進行し、将来への夢を描けない子供たちが急増している。

その背景には、子供の成長の手助けとなるべき学校や家庭、地域、企業、それぞれの大人の事情が大きく関わっている。

教育現場においては、学校外の社会に触れる機会に限られる教師にとって、社会の期待に応える教育環境を整備し、的確な進路指導を行うことはなかなか難しい。また、“教育の出発点”である家庭においても、しつけを行うべき親の役割が機能しなくなり、その集合体である地域の役割も希薄になっている。さらに、企業・経営者においても、今まで教育現場に関心を払わず、企業や社会の変化を学校や子供たちに伝える努力をしてこなかった反省がある。この責任は



大きい。

こうした状況を脱却し、活力ある日本を支えていく人材を育成していくためには、学校・家庭・地域・企業の役割を見直し、互いに連携し合っ

て子供たちを見守っていくという視点が求められている。

経済同友会の教育提言 ― 総論から各論まで幅広く提言

- ◆「新しい個の育成——世界に信頼される日本人を目指して」
(1989年：世界に通用する人材教育委員会：小林陽太郎委員長)
- ◆「『選択の教育』を目指して——転換期の教育改革」
(1991年：教育問題委員会：小林陽太郎委員長)
- ◆「大衆化時代の新しい大学像を求めて——学ぶ意欲と能力に応える改革を」
(1994年：教育改革委員会：櫻井修委員長)
- ◆「学校から『合校』へ——学校も家庭も地域も自らの役割と責任を自覚し、知恵と力を出し合い、新しい学び育つ場をつくろう」
(1995年：教育委員会：櫻井修委員長)
- ◆「『学働遊合』のすすめ——いつでも学び・働き、その楽しさを感じられる社会を目指して、企業は意識を変え、行動する」
(1997年：教育委員会：渡辺滉委員長)
- ◆「創造的科学技术開発を担う人材育成への提言——『教える教育』から『学ぶ教育』への転換」
(1999年：教育委員会：金子尚志委員長)
- ◆「学校と企業の一層の相互交流を目指して——企業経営者による教育現場への積極的な参画」
(2001年：教育委員会：北城恪太郎委員長)
- ◆「若者が自立できる日本へ——企業そして学校・家庭・地域に何ができるのか」
(2003年：教育委員会：河野栄子委員長)

企業・経営者はどのような貢献ができるか？

学校問題をめぐる重要課題について継続的に取り組んできた経済同友会では、1989年、社会に求められる人材像を示した「新しい個の育成」を皮切りに、教育改革の基本理念を示した「『選択の教育』を目指して」(91年)、大学改革に言及した「大衆化時代の新しい大学像を求めて」(94年)などを次々に提言。1995年には初等中等教育における新しい学校のコンセプトを示した「学校から『合校(がっこう)』へ」を、1997年には教育改革の実現に向けた企業自身の意識改革や行動の必要性を指摘した「『学働遊合(がくどうゆうごう)』のすすめ」を発表した。

なかでも、“学校、家庭、地域社会が各々の役割と責任を自覚し、みんなで知恵と力を出し合って、子供たちの新しい学び育つ場をつくるために、できるところから改革を具体的に進めていくことが大切”と呼びかけた『合校』の考え方は、教育現場からも共感を呼び、交流活動の指針

となっている。

“提言”から“行動”へ 交流活動がスタート

経済同友会のこれまでの提言内容を踏まえたうえで、1999年度教育委員会(北城恪太郎委員長)では実践を開始。“活力ある日本社会を支えていく人材の育成・教育のために、企業・経営者はどのような貢献ができるか”を基本テーマに、まず学校教育の現状を知ることが重要との考えから、経営者自らが中学

校・高校の授業にゲスト講師として参加したり、学校関係者や保護者との意見交換等を行う交流活動をスタートさせた。

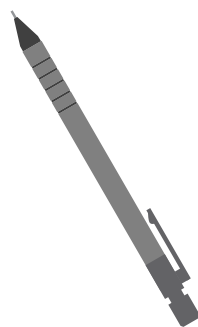
2001年には、「学校と企業の一層の交流活動を目指して—企業経営者による教育現場への積極的な参画—」を発表し、交流活動を経済同友会全体の一環として継続的に実施していくことを宣言した。2003年には学校と企業・経営者の交流活動推進委員会(石川史郎委員長)を立ち上げ、交流活動を充実させるべく、幅広い活動を展開している。



学校と企業・経営者の交流活動レポート

<東京都北区>

飛鳥中学校



これからの社会では、自ら考え、課題を見つけ、追求し、解答を見つけられるアクティブな人材が必要とされている。そのため、これからの学校には、実社会の風を積極的に学校教育へ導入して生徒・教職員の意識改革を図ると共に、家庭・学校・地域の親密な関係づくりを推進し、大人全員で子供の教育に関わっていく「開かれた学校」を実現させていくことが重要だ。ここでは、まず北区立飛鳥中学校との交流活動の事例を紹介しよう。

飛鳥中学校では学年ごとにテーマを設け、環境問題を研究したり、ボランティアや職場を体験したり、伝統文化に触れる「総合的な学習」を展開^{*1}している。中でも、働くことへの関心と理解を深める勤労学習は、自己の将来の生き方を考え、目標を身につけていく上で重要な学習と位置づけられている。

この勤労学習を同校では2年生を対象に実施。既に生徒は夏休み中に【職業インタビュー】を経験しており、その第2弾として9月5日に【出張授業】が行われた^{*2}。

今回の出張授業のテーマは「ようこそ先輩!」。実社会で活躍している人生の先輩に仕事や生き方の話をじっくり聞こうというのがその狙いだ。

当日は経済同友会の他に、同校の父兄で構成する「飛鳥中おやじの会」等も協力。多彩な経歴を持つ15名の講師が参加した。2年生(83名)が各5~6名の小グループに分かれ、「働くこと」にまつわるトークセッションを展開。わずか45分間の授業ではあったが、最後には生徒たちから様々な質問も寄せられるなど、活発な交流が行われた。

飛鳥中学校2年生 総合的な学習「勤労学習」の目的

- 1) 地域での職場体験を通して、地域の人々との交流を図り、身近なところにも様々な職業や生き方があることを知る。
- 2) 職業や働くことへの関心と理解を深め、自己の将来の生き方を主体的に追求する態度を身につける。

「目標を持つことの大切さを出張授業で学んでほしい」

飛鳥中学校 成澤純子先生

中学2年生という時期は、周囲を含め、どうしても勉強への比重が高くなってしまいがちです。しかし、目的を持たずにただ勉強しても、あまり子供たちの身にはなりません。この時期に最も重要なのは、将来の生き方を考える機会を持つことだと思います。その経験があるかどうかで、子供のがんばり方も変わってくるはずですよ。

本校の出張授業は今年で3年目となりますが、昨年までの全体授業から今回は小グループ単位に変更し、講師と子供が間近で会話できる形にしました。

大勢で聞くと他人事のように聞こえてしまう話も、講師から直接メッセージを受けたり、学校では教わらない実社会の話を聞いたりすると、子供たちの反応もずいぶん違うようです。ふだんは目立たない子供が身を乗り出し、夢中で講師の話に聞き入る光景には、正直、驚きと感動を覚えました。

勤労学習はまだ試行錯誤の段階ですが、皆様の協力を得ながら、子供たちの将来につながるこうした交流の機会をもっと有効に活用していきたいと思っています。

※1 飛鳥中学校の「総合的な学習の時間」：1年生は「環境」(身近なものから地球環境)、2年生は「職場体験・福祉体験・国際理解」、3年生は「日本伝統文化・異文化理解を通じた国際理解」のテーマのもと、毎週実践されている。 ※2 飛鳥中学校では、11月に勤労学習の第3弾として【職場体験】を予定。その後、これらの成果が12月に発表されることになっている。

講師の紹介・・・

今回の出張授業には、経済同友会の6名に加え、雇用能力開発機構から6名、飛鳥中おやじの会から3名が講師として参加。それぞれが実社会での豊富な経験談を織り交ぜながら、「仕事のこと」「仕事との出会い」「仕事の喜び」などについて個性的な授業を展開した。



〈役職は10月17日現在〉



小西一明氏
商船三井 専務取締役



同前雅弘氏
大和証券グループ本社 顧問



野呂正則氏
大星ビル管理 取締役社長



松崎昭雄氏
森永製菓 相談役



茂木賢三郎氏
キッコーマン 取締役副社長



渡邊太門氏
フランクリン・テンブルトン・インベストメンツ
取締役インスティテュショナル本部長

経済同友会以外の講師（敬称略）

雇用能力開発機構

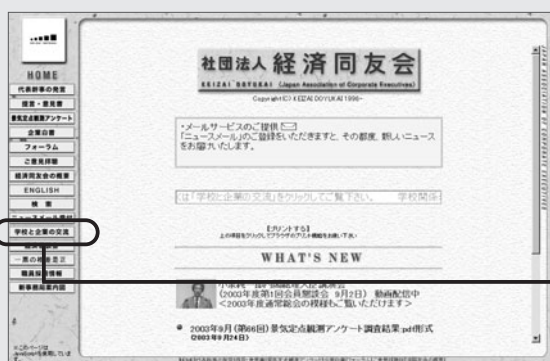
森田孝之 不二家 法務・株式担当課長
北沢正雄 不二家 人事・人材開発担当課長
三浦 亨 不二家ロードサイドレストラン 商品企画課長
高長谷実 不二家ロードサイドレストラン 経理・人事・採用担当課長
高橋秀典 不二家ロードサイドレストラン サービスインストラクター（課長職）
高橋 武 雇用能力開発機構東京センター 相談第3部門専門役

飛鳥中おやじの会

安松祐一 情報処理系会社員 システムエンジニア
栗田秀樹 貴金属宝飾品デザイン・制作 メーカー・卸業
桜井武司 独立行政法人職員 国際農林水産業研究センター

「学校と企業・経営者の交流活動」は
会員有志のボランティアによって支えられています。
講師登録をご希望の方は、事務局*までご連絡ください。
なお、活動の詳細については、経済同友会ホームページ
「学校と企業・経営者の交流活動」コーナーをご覧ください。

<http://www.doyukai.or.jp/>



トップページ左側にあるインデックスの「学校と企業の交流」(囲み部分)をクリックすると、詳細ページへジャンプします。



[* 事務局担当：平野・織田 ☎03-3284-0220]

飛鳥中学校 学校と企業・経営者の交流活動レポート

「ようこそ先輩！」

勤労学習の一環として実施された今回の【出張授業】のテーマは、「ようこそ先輩！」。生徒たちが職業や働くことへの関心と理解を深め、自分の生き方を見つけていくうえでは、親や教師よりも、実社会で活躍する“人生の先輩”からの声の方が時として強い説得力を持つ。今回も多彩な講師たちが自らの経験を踏まえながらユニークな授業を展開。生徒一人ひとりの心に確かなメッセージを残してくれた。



僕らの先輩はどんな人？
どんな仕事をしているの？



この日、飛鳥中学校では15名の講師による出張授業が実施されたが、生徒にとって一番の興味は、「どんな講師が来るのか？」にあったようで、緊張した面もちで始業のベルを待っていた。

そんな生徒たちの緊張をほぐすため、例えば、商船三井の小西一明氏は「君たちの好きなコトを教えて？」という意表を突くひと言から授業をスタートした。

「バスケットが好き」「美術が好き」と雑談を交わしながら生徒の緊張感が緩んだところで会社案内を配り、今度は「船に乗ったことある人？」と質問。資料に見入る生徒たちを前に、「日本は海に囲まれてお

り、資源がない。鉄、石炭、木材、小麦、天然ガス、石油……どれくらい日本でとれるか知っているかな？」と、身近な資源の名を黒板に書き始めた。

真剣に考え込む生徒たちに対し、小西氏は「これらはほぼ100%輸入に頼っています。日本はこうして外国から輸入しないとモノを作れません」と、輸入に頼る日本の状況を説明しながら、「商船三井では東京タワーと同じ330mクラスの船舶を500隻ほど動かしています。それを毎日動かしても足りないほど、日本という国は多くのモノを輸入しています」と、氏の本業である海運業の役割と仕事のスケール感についてゆっく

Voice!

生徒の感想文

小西一明氏担当生徒

仕事の楽しさ、大変さを知りました先輩の話聞いて初めて知ったことがたくさんありました。輸送手段の9割を船が占めていることに驚きました。飛行機やトラック、鉄道がもっと運んでいるとばかり思っていました。また、「日本には資源が全くなく、資源を輸送できなくなったら日本人は生活できなくなる」という話は、正直、少し怖かったです。(2年A組 S.S.)

昔の夢が仕事につながるんですね昔から地理が好きだったというお話を聞き、子供の頃興味を持っていたものは大人になっても関係してくるのだなあと感激しました。また、輸送の仕事は月によって儲かったり、そうではなかったりするらしいので、人生って大変だなあと思いました。輸出・輸入の会社があると思っていなかったもので、勉強になりました。(2年A組 I.T.)



「勝ち負けだけじゃない。“WIN-WIN”の関係もある」 茂木賢三郎氏

りと語り出した。

仕事で嬉しかったことは？
仕事のやりがいとは？

どんな仕事にも成功と失敗はあ

る。絶えず変化を続ける実社会の現実を踏まえながら、働くことの楽しさや厳しさ、そして、達成感をきちんと生徒たちに伝えていくことも出張授業の重要な役割だ。

キッコーマンの茂木賢三郎氏は、醤油の販売競争を素材にしながら

「高く売りたい企業と安く買いたい消費者、そして競合する企業同士の競争」という構図を通して、経済の仕組みを説明。さらに、醤油のボトルリング作業を海外で行っていた事例を振り返りながら、仕事の達成感について次のように話し始めた。

野呂正則氏担当生徒

人生っていろいろあるんですね
戦争の時に生まれ、既にお父さんがいなかったことを話してくださいました。私は平和な時に生まれて本当に良かったです。小さい頃は医者になりたかった先輩が、弁護士をめざして法学部へ入学し、生命保険会社を経て、今ではビル管理会社の社長をされています。人生っていろいろなことがあると実感しました。(2年A組 R.I.)

先輩の人柄が伝わってきました
仕事には「はい」「お願いします」「ありがとうございます」の3つの言葉が大切だと教えてくれた先輩の人柄が私たちにも伝わってきました。生命保険会社のマネージャーとしてNo.1の実績をあげながら、部下の管理監督責任を負わされてしまった先輩のエピソードを聞いて、大人の世界の難しさをちょっとのぞいたような気がします。(2年A組 H.K.)

松崎昭雄氏担当生徒

感謝することの大切さを学びました
いちばん驚いたのは、人間は生き物を殺し、それを食べているという事実でした。今まで何も考えずに肉や魚を食べていたので、改めて考えると本当に感謝しなければならないと思いました。また、心の支えになるものを見つけるというお話も深く心に残りました。私の心の支えは家族かもしれません。(2年B組 S.S.)



「夢を実現するための第一歩は 自分の目標をきちんと人に言えること」

渡邊太門氏

「昔、キッコーマンは醤油のボトル詰め作業を外国の会社でやっていたんだ。日本で作った醤油を船で外国に運んで、ボトルに詰める作業だけを海外でやる。その方が費用

が安かったからなんだけど、最初はなかなか効率が上がらなかった。先生はその原因を分析した。すると、機械が時折故障し、作業そのものがストップしてしまう事実が判明したん

だ。そこで、この故障をなくすための研究を重ね、生産効率を上げることに成功。会社としても嬉しかったのはもちろんだけど、それ以上に喜んだのはボトリング会社。故障が

同前雅弘氏担当生徒

中学時代の様々な話にびっくり
中学時代のエピソードが特におもしろかったです。先生と一緒に登山したこと、親に学校に行くのを反対されたこと、今ではとても思いつかない珍しいことばかりでした。これからの私たちについてのお話の中で言われた「生まれた時、何を手に持っているのか」という言葉は、とてもすてきで勇気が湧いてきました。(2年B組 K.A.)

学校の意味が分かりました

小学校の時、校長先生に「学校は何のためにあるのか?」と聞かれ、「将来社会に出るために勉強するところ」と答え、「違う」と言われたことがあります。先生は答えを教えてくださいましたが、先輩が話された「自分のやりたいことを見つける場」という言葉の中に答えがあるような気がしました。株の話は、正直難しかったです。(2年B組 M.H.)

茂木賢三郎氏担当生徒

がんばって自分の夢を叶えます
先輩から将来の夢を聞かれた時、多くの人は「人の役に立つこと」と答えました。夢を持つのはいいことで、そのために何をすべきかという疑問について勉強という答えが出ました。自分が就きたい仕事と今の勉強は関係ないことかもしれません。それでも先輩は、「生きていく上での基礎的な知識は必要」と言われました。(2年C組 R.S.)



改善されて効率がアップすれば、それだけ商品をたくさん作れるからね。そこで仕入れ値の値下げを交渉したところ、『OK!』となったんだ」

近年、いわゆる中間層がなくなり、勝ち組と負け組に二分される傾向が強まっていると言われる。子供たちの間にも厭世的な空気が蔓延している。だが、茂木氏は「知恵を絞って努力すれば、両者が勝者である“WIN-WIN”の関係を築くことも可能」と、強調。仕事を通じて学んだ教訓を伝えると同時に、知恵や教養の大切さをわかりやすく説いた。

勉強するのは何のため？ 夢に近づくためには？

茂木氏はこのエピソードに続けて、「世界には60億の人が住んでいます。この人たちを助けたり、幸せにすることは簡単ではないね？ みんなが平和で幸せに暮らすために、知恵や教養が必要なきがたくさんある。だから君たちが今できることは、勉強することなんじゃないかと、先生は思う。みんなはどうかかな？」と問いかけた。このように、職業観の

育成と同様に、夢や目標を持つことの大切さ、勉強することの意味を伝えていくことも、出張授業の重要な役割となる。

フランクリン・テンプルトン・インベストメンツ取締役の渡邊太門氏は、人生の転機となった人物との出会いを通じて学んだ“S = Success” “M = Motivation” “I = Institute”というビジネスのキーワードを紹介。一人ひとりの夢を尋ねながら、「夢を達成するためには、自分のやりたいことをきちんと人に言えるようになることが大切」と、「夢実現の6か条」を伝授。森永製菓の松 昭雄氏は、「エンゼル・マーク」の由来と天使を研究する「エンゼル財団」のエピソードを織り交ぜ、人を幸せにする仕事の誇りを強調。「人は一人では生きて行けない。いつも人に優しく、精神的にも世界をリードしていける日本人になってほしい」と語った。

それぞれ表現方法は違ったが、講師全員が夢や目標を持つことの大切さ、また、それに向かって勉強することの意味を伝えていた。

働くことの意味を家で考えました
働くとは何か、なぜ勉強するのかという質問を、家に帰ってから考えてみました。僕の考えは、家族のために働く、将来の夢を叶えるために勉強するということでした。サラリーマンにはなりたくないという気持ちはありますが、まだ夢は見つけていません。近いうちに見つけて勉強ががんばっていきたいと思います。(2年C組 M.U.)

渡邊太門氏担当生徒

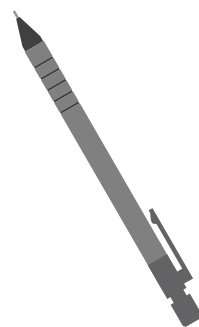
身近な夢が見つかりました
社長が来るということで緊張していましたが、優しくそうな人で安心しました。分かりやすい言葉で仕事のこと、「夢実現の6か条」について話していただき、良かったです。将来の夢を聞かれた時、私は答えられませんでした。今はまず部活で記録を更新するという夢ができました。これからも6か条を実践します。(2年C組 R.E.)

夢の実現へ向かってがんばります
イチローが小学6年生の時の作文を読んだら、先輩に教えてもらった夢の実現方法の内容が入っていました。お話を聞いていた時は半信半疑でしたが、このようにがんばれば自分の夢も実現するのだということが信じられるようになりました。僕の夢の実現はまだまだ先ですけど、一生懸命がんばりたいと思います。(2年C組 K.S.)

交流授業 誌上プレビュー

<東京都墨田区 本所中学校3年4組>

「国際社会に生きる日本人の役割」



講師：北城恪太郎氏（日本アイ・ビー・エム 取締役会長／経済同友会 代表幹事）

墨田区立本所中学校では、「総合的な学習の時間」の一環として、企業人や地域で活動している人々を招いて講話を開いたり、地域に出掛けてボランティア活動を体験したり、職場訪問などを盛り込んだ【かしわ学習】が展開されている。その一環として、経済同友会による交流活動も毎年行われており、今年も9月5日、北城恪太郎氏を講師に迎え「国際社会に生きる日本人の役割」をテーマとする特別授業が実施された。

中学時代の先生のひと言を
きっかけに英語に取り組んだ

現在、私は日本IBMという会社の取締役会長を務めています。この3月まではインドから東の国々を統括する、IBM アジア・パシフィックの責任者も務めていました。本社のあるアメリカはもとより、アジア各地を回って現地の人々と話す機会も多く、お互いの意見を交換する場合、当然、英語を使います。

今では私も英語が話せますが、中学時代を振り返ると、実はあまり得意な教科ではありませんでした。卒業前に担任の先生から「他の教科の成績と比べて、英語があまりよくない」と言われたことが悔しくて、高校3年間で必死に勉強しました。最初のうちはなかなか上達しませんでした。それでも半年ぐらい続けると自信がついて、みるみる英語が面白くなりました。

現在の会社に入社後、アメリカの大学院に2年間留学する機会を得ましたが、難関の選考試験を突破できた

のも、高校時代の経験が役に立ったと思っています。

地域によって異なる世界地図
それぞれの文化・世界観を実感

アメリカの大学院に通っていると、様々な国の人々と出会います。言葉や肌の色は違いますが、一緒に勉強し、会話を重ねていくうちに、それぞれに独自の文化や世界観があることがだんだん分かってきました。そのこ

Voice!

生徒の
感想文

今の勉強が将来役立つことを実感自分で進んで物事に取り組んでいくことの大切さが印象に残りました。今勉強している英語や数学は将来の自分の進路に役立ってくるのですね。毎日、何気なく勉強していましたが、苦手な所もそのままにしないで、あきらめずがんばろうと思いました。(A.O.)

挑戦する気持ちを磨きます

今、企業が必要としているのは良い大学を出た人ではないと聞いて、ちょっと驚きました。私自身、問題を作り、自分で解決していけるような大人になりたいと思いました。そして、受験を含め、何事に対しても強い気持ちを持って挑戦していこうと思いました。(A.M.)



「自分の好きな分野で 仕事ができたら、 それに勝る幸せはありません」

とをはっきり実感させてくれたのが、1枚の世界地図です。

ふだん使っている世界地図は太平洋が中心で、皆さんもそれが当たり前と思っていることでしょう。ところが、外国の地図は全く違います。ヨーロッパのものは大西洋が中心。欧米人は日本のことをよく“Far East(極東)”と言いますが、それは日本が東の端に描かれているからです。アメリカではアメリカ大陸が中心、オーストラリアでは南極が上に描かれており、皆それぞれ異なる視線で世界を見ている

ことに気付くと思います。

日本は政治、経済、文化など多彩な分野の交流を通じて、世界とつながっています。英語を学ぶ機会があれば、こんなことも思い浮かべてほしいと思います。

**好きな分野の勉強は
時間を忘れるほど楽しい**

高校から大学へ進む際、もともと数学や理科が好きだったので工学系へ

進むことは決めていましたが、具体的に何を勉強するかで悩みました。今から30年前、そんなときに「これからコンピュータの時代」という新聞記事を目にし、「これだ!」と直感してコンピュータ関連の学部・学科に決めました。

勉強と聞くだけで皆さんは敬遠するかもしれませんが、好きな分野を勉強することは本当に面白いものです。私はコンピュータのソフトウェアを作る勉強をしましたが、プログラムが作動しない時でもその原因を追求していくことは推理小説の謎解きをしているようで、面白くてやめられませんでした。当時のコンピュータはたいへん貴重なもので、学生が自由に使えるのは夜中くらいでした。そんなこともあって、卒業論文には入社前日の3月31日夜まで夢中で取り組んでいたことを鮮明に覚えています。

**学生時代は自分のやりたい
ことを見つける時間**

私はコンピュータを学んだ関係で現在の会社に就職したわけですが、皆さんもいずれは社会で働くことでしょう。どうせ働くなら、自分にとって興味のある分野、面白いと思う分野の仕事に就いた方がいいに決まっています。そのためにも、「自分の関心のある分野は何か?」「将来何になりたい

苦手を克服した努力に感激

IBM会長さんでも、中学時代は英語が苦手だったという話は意外でした。自分のやりたいことのために必死に勉強する努力はすごいと思います。社長になるためには自分で会社を作るか、会社で努力するかの2通りだとか。自分にも可能性があると思いました。(K.N.)

関心の持てる分野を見つけます

これからの社会には英語が必要だけど、努力しないと身につかないということを思い知らされました。これからの日本には、学歴ではなく、物事を自分で考え、自分で行動に移せる人が必要とされているのですね。私も早く関心が持てる分野を見つけたいと思います。(F.A.)

きっかけの大切さを学びました

中学卒業時に言われたひと言がきっかけで英語を猛勉強し、新聞記事がきっかけでコンピュータの分野に進学。きっかけはささいなことだけど、その時々で努力すればいい方向に向かうのだと思いました。私も自分の好きなことをがんばって、後悔しないようにします。(H.S.)

いのか?」「夢に近づくためにはどんな勉強をしたらいいのか?」というようなことを考えてみてください。

目的がないまま勉強しても、なかなか集中できないはず。目標や興味・関心は途中で変わってもかまいません。自分のやりたいことを見つけることが、学生時代で最も重要なことだと思います。

自発的に問題を見つけ、 解決できる人材に

最後に、これからの国際社会を生き抜いていくうえでのヒントを1つ提示したいと思います。

今、日本の製造業は中国や東南アジアなどとの競争で大変厳しい時代を迎えています。例えば、1足180円の運動靴が中国から輸入されています。これらの国は人件費が安いので、良い製品が安く生産できます。しかし、それだけが日本企業苦戦の原因ではありません。かつての日本企業が欧米の自動車やカメラから学んだ

ように、彼らは新しい技術を吸収しようと休む時間を惜しんで勉強します。

こうした状況下では、もはや中国や東南アジアと同じ製品を作っても彼らに到底太刀打ちできません。これから日本企業が生き残っていくためには、他の国が真似できない新たなオリジナル製品を生み出していくことが不可欠となっています。

競争相手が欧米だった時代の日本企業では、与えられた課題を学び、その解決に向けて努力できるいわゆる優等生が必要とされました。しかし

競争相手が拡大した現在は、学歴に関係なく、自ら課題を見つけ、その答えを導き、その上で行動にまで移していけるチャレンジ精神を持った人材が求められています。

私にとって中学校卒業前の先生のひと言が英語を勉強するきっかけとなり、現在の仕事上でも役に立っています。皆さんも人生のきっかけとなる言葉や出来事にこれからたくさん出会えるはずです。そのきっかけを大切に、本当に自分がやりたいと思うことを見つけていただきたいと思います。



「自ら問題を見つけ、解決し、 新しい課題に挑戦する。 前向きな人材が求められます」

自分で考えない仕事はつまらない
答えだけでなく、問題も自分で考えるのはとてもいいことだと思います。ただ言われたことをやるだけなんて楽しくないし、それならコンピュータでも充分じゃないでしょうか。いろいろな仕事がある中で、自分にぴったりの仕事を探すのは大変だなあと思いました。(M.I.)

日本人に足りないのは、挑戦する心
今の日本に足りないものは、意欲というか、チャレンジ精神であることが分かりました。また、社長になりたければ会社を作ればいいのかというお話は意外な発見でした。自分の関心のある分野、将来何になりたいかを考えると、勉強は楽しくなると思ってきました。(G.T.)

北城 恪太郎氏

経済同友会代表幹事
日本アイ・ビー・エム取締役会長
1944年生まれ。67年慶應義塾大学工学部卒業。72年米国カリフォルニア大学大学院(バークレー校)修士課程修了。67年日本アイ・ビー・エム入社後、米IBMコーポレーション本社にて会長補佐を務める。86年日本アイ・ビー・エム取締役就任。常務取締役、専務取締役、取締役副社長を経て、93年取締役社長に就任。99年IBMアジア・パシフィック プレジデント、日本アイ・ビー・エム取締役会長に就任。2003年IBMアジア・パシフィック プレジデントを退任、現在に至る。
87年経済同友会入会。94年幹事、2000年副代表幹事、2003年4月代表幹事に就任。90年度地球環境委員会副委員長に就任以降、現代日本社会を考える委員会、企画部会、情報化社会を考える委員会、新産業基盤委員会、諮問委員会の副委員長を、98年度新産業基盤委員会、99～2000年度教育委員会、2001～2002年度企業経営委員会の委員長を務める。

After the class

本所中学校校長

森本芳男氏

経済同友会代表幹事

日本アイ・ビー・エム取締役会長

北城恪太郎氏

「社会環境が激変している現実 子供も親も早く気付いてほしい」

墨田区立の中学校と経済同友会との交流活動が始まって5年目。この間、延べ100名を超す企業経営者が教育現場に足を運んだ。交流活動を積極的に推進してきた経済同友会代表幹事の北城恪太郎氏と本所中学校校長の森本芳男氏にそれぞれの立場から、学校教育の現状と問題点、交流活動の成果について伺った。

——本日の授業を終えての感想をお聞かせください。

北城氏：中学3年間は人生の中でもかなり大事な時期です。将来何になりたいかを考えている子供はまだ少ないかもしれませんが、何かきっかけがあると、自分で将来のことを具体的に考えるようになるはず。目的が見えないと学ぶ意欲が湧かないもので、先生も父兄も機会あるごとに「将来何になりたいのか」「どんな仕事をしたいのか」と問い掛けることがきっかけを与えたいと思います。

——交流活動を通じて、教育現場の変化を実感できますか。

北城氏：「総合的な学習の時間」ができたこともあって、各学校がそれぞれ創意工夫を始め、父兄や地域の人々と力を合わせて地域に開かれた学校を作ろうという動きが少しずつ見え始めています。経済同友会としても実社会の視点から子供たちの教育のお手伝いをしていこうということで交流活動

を始めましたが、経営者に限らず様々な立場の大人がもっと教育の現場に出て行かなければならないと思います。また、企業という視点で言えば、経営者が学校に出て行くことで、その企業の社員も教育活動に積極的に関わるようになるといった波及効果も見られます。お役所と教育現場が改革の最も遅れている分野と言われてきましたが、それでも立派に改革を推進されている先生方はいらっしゃるし、校長先生や教頭先生のリーダーシップを発揮しやすい環境に変わってきたと思います。

——校長先生の視点から教育現場の変化についてお聞かせください。

森本氏：「なぜ勉強しなければいけないのか」という目的が子供にとってますます見え難い社会になっています。しかし、その環境の変化に気付いていない子供も親も大勢います。その人たちに変

化に気付いてもらうためには、社会の第一線で活躍されている経営者の方々から直接お話を伺うことが最もインパクトのある方法だと思います。私共も日頃から「目標を持つことの大切さ」を話していますが、外部の方から話していただくことで子供たちへの説得力は全く違ってきます。

——最後に、交流活動の将来的な展望をお聞かせください。

北城氏：子育てをしている社員がもっと教育の現場に出て行けるように、私たち経営者も奨励していくことが必要と考えています。また、今後は先生や子供が職場体験や企業見学できる機会をもっと増やしていきたいと思います。実際の現場を見ていただければ、企業がどのように変わってきているかを肌で感じていただけたと思います。

森本氏：交流活動を実施している学校はまだ2～3割程度にすぎません。こうした交流活動が全国的に広がれば学校教育も大きく変わると思います。まだ保守的な部分もありますが、教育現場では経済同友会の交流活動を含め、外部の様々な大人からの協力に大きな期待を持っています。